

# 昆布刈石



鏡のように空を映すから海は水色に描かれるのだ。海が鉛色なのは、どこまでも灰色な空のせいだと徳市は思った。風は強く吹いていた。休むことなく吹いていた。潮風に吹かれてシャツはしっぽりと生乾きの洗濯物のようだ。汗が乾いていくことなくシャツが体にまとわりつく。北海道とはいえ、暖流に近いこの地は夏は当たり前に暑いのだ。朝方の霧はとうに海風に吹かれて丘を越えていってしまった。晴れば陽は潮がべったりと付いた肌を焼く。働きはじめてから数日で徳市の顔は焼けて赤くなっていた。親方はそれもじきに黒くなるだろうと、自分の二の腕を見せながら笑った。赤銅色の顔に深いしわが走り、白い歯が優しくほほえんだ。

夜明けとともに昆布採り漁は一斉にはじまる。海辺にうち寄せられた昆布を拾い集めるのは漁師小屋に詰め込まれたアルバイトたちの仕事だ。集められた昆布は干場で拵げられ乾かされる。乾いた昆布を再び集め終えたあとの午後、彼らは旅人の顔を少しだけ取り戻し、海を眺めたり丘を散歩したりして過ごすこともある。そして、何かを思いだしたかのようにぽつりぽつりと荷物をまとめて旅立って行くのだった。徳市はそんな風に多くの仲間を見送りながら、もう数ヶ月もの間をここで過ごしていた。自分でも古株になってしまったと思いはじめていた。

ある日の午後、徳市は食事の当番の買い出しで町に出ていた。漁師小屋のでの生活も長くなってくると、街に出るのが楽しみに思えるようになってくる。徳一と一緒にやってきた三人と別れ、書店に立ち寄ってから、夕方、最終の岬行きのバスで戻るつもりだった。このバスは、ちょうど沈んでいく夕日に向かって海沿いを突っ走っていくので、僕たちの間では夕焼けバスと呼ばれていた。街で一番大きな書店を出て、一番近いバス停に向かっていく途中に、親方の車に拾われた。彼はアイスを食べたいと言って、車をドライブインに入れると、ずいぶんと背の高いソフトクリームを両手に持って戻ってきた。僕たちはしばらくの間、どんどん溶けてくずれてくるソフトクリームをたささないようにと、話もしないでなめ続けていた。食べ終わってしまうと二人の乗るトラックはエンジンをうならせて夕焼けバスのおよそ倍のスピードで突っ走り始めた。足を突っ張って踏ん張っている徳市に親方は船に乗ってくれないかと話しかけた。アクセルを踏む足を緩めもせずに、徳市が何か言うのをこっちを見たままで待っているのだから、徳市はあわてて身を乗り出して答えなければならなかった。「かみさんがはらんじまったのよ。」という理由のようだった。徳市は父親となる人間は少なくとも運転に関してはもう少し慎重であるべきだと思いつつながら、祝いの言葉を返した。沖の根のあたりでとれる昆布は高級品として高値で取り引きされていた。浜辺で採るのと違って太陽が昇って海の中に光が届くようになってからだから、朝が遅くなる代わりに午後の自由な時間が短くなってしまったのだ。払いはかなり良くなるという条件だった。

漁は親方と二人で小舟に乗り、沖の岩礁の近くに行って、カギのついた棒で昆布をかき集めるといった単純なものだった。岩礁に乗り上げないように船を操ることが必要だったはじめは親方が操船していたのだが、そのうち行き帰りに舵を任されることから始めてだんだんと覚え、一週間も経たないうちに交代で舵を持つようになった。カギ棒で昆布を巻き採るのは思いの外の力仕事で、二十分も続けると両腕がぱんぱんに張ってしまうのだった。海は毎日穏やかというわけではなかったので、漁に出ない日もあったのだが、漁に出ると二人は船べりからあふれるほど山のように昆布を積み上げて港に帰ってきた。昆布はいくら採っても減ったようには見えず、海の底から無尽蔵に湧いてくるかのようだった。採った昆布を手にとって見ると、浜で採れるものよりずいぶんと柔らかくきれいな色をし

ていた。北国の海は夏でも濁りを知らず、船べりから落とした貝殻がゆらゆらといつまでも見えているほど透き通っていた。寄せた波が泡をはじかせながら返ってくるような岩場の近くでも水底をのぞくことはたやすかった。そこには、先の見えない下り坂をどこまでも続いている昆布の斜面があった。深いところでは水の流れが違うのだろうか、ときおり昆布がひゅうとひるがえってかすかに届いている光を返してよこすのを見ることができた。

徳市が海にでるようになって二週間になった日のことだった。海は静かで凪いでいた。いつもなら近寄ることできない岩場には手つかずの昆布の森が繁っていた。帰りの船はいつにも増して昆布で満杯になっていた。上機嫌の親方が舵を取り、徳市は山盛りの昆布の上にへばりつくようにつかまるところもなく横になっていた。欲張ったせいで、息をすることすら押さえておとなしくしていないと、昆布の山が崩れて海へ落ちてしまいそうになるほどだった。実際港へ入ろうと親方が大きく舵を切ったときに船が揺れて傾くと昆布の山が少し崩れてしまい、徳市は身を大の字にして昆布を押さえ込まなければならなかった。ところが、悪いことに、そのとき港を出る船がこちらに向かってきたために、親方はもう一度大きく舵を切ってエンジンを反転させたのだった。船は大きく傾いた。馬鹿野郎と親方が怒鳴るのと、かなりの量の昆布をつかんだまま徳市が海に落ちるのが同時だった。ゴム製の作業着を着ている割には浮力というものが感じられず徳市の体はどんどん海に潜ってしまうのだった。相手方の船のスクリューがまだ回って気泡をまき上げているのが見えて、徳市は自分からもっと深く潜らなければならなかった。気がつくまで徳市は7、8mの深さになろうかという海の中で、上がるでなく潜るでなくくらげのようにふんわりと漂っているのだった。見上げると、ちょうど上りきった太陽が水面に映る月のようにゆらゆらと揺れて輝いていた。太陽の光はばらまかれてしまった昆布の隙間から光の筋となって海の中に差し込んでいた。ぷくぷくと泡が立ち上っていた。突然、水面に投げ込まれた物体によって太陽の光は散り散りになって砕け散った。赤と白の浮き輪だった。徳市はそれを見て正気を取り戻し、海面に上っていった。

徳市は「おっこちまった」のだった。

北国の夏が過ぎゆくのは早い。昆布漁も終わりに近くなった。徳市は親方から船を出すのも後何回かになるだろうと聞かされていた。次はどこへ向かうのかを考えなければならなかった。漠然と山の方に行こうと思った。海から見ると初夏には青々と輝いていた山々がぐたびれて深く沈んだ緑色に変わったのだなと気がついた。やがて山は頂から火がついたように燃え上がり、麓に向かって赤や黄色に染まっていくのだ。港に戻ってきたとき、徳市は船のへさきの昆布の上に立っていた。港の入り口の灯台を過ぎていつものように船体をやや傾けて船は岸壁に向かってゆっくりと回り込んだ。ところが傾き加減が特に大きかったというわけでもなければ、無理にたくさんの昆布を積んでいた訳でもないのに、徳市はポンと船から落ちてしまったのだ。あがいて船上に残ろうとする仕草の一つもなしに、徳市はまっすぐ落ちていった。「また落ちやがった。」と親方は叫んですぐにエンジンを止めた。腹に貝殻の代わりに重たい石を抱えたラッコのように空を見ながら、徳市はくるくると回って沈んでいった。徳市の体は防波堤の上で干からびて固まってしまったヒトデのようにこわばってしまっていた。そして、ここは、コンクリートの堤に囲まれた港の中ではなくて、徳市が採り続けてきた岩場の海底に違いなかった。沈んでいくにつれて海の青さは失せてあたりは漆黒へと向かおうとしているように思えたが、代わりに昆布が自ら発光して、まるで蛍光灯のような淡い黄色い光を放っていた。それでもまだ潜り続けているような気がした。耳がきんと痛んだ。海底には光る昆布の林が見えた。体が強く吸い込まれたように感じて、そろそろ水底に着くかという頃合いに、徳市は背中が昆布の森の茂みに触れたのを感じた。そして、体はゆっくりとその茂みの中にもぐり込んでいった。昆布のつるりとした茎が徳市の体を撫でた。ところがごつごつした岩の感触はいつになっても背中にやってこなかった。昆布の森に埋もれてしまった徳市に見えるものは目の前いっぱい広がって自分を包み込む昆布だけだった。急に背中に何かが吹き付けたようなショックがあった。直後に数千ものきらきら光る透明な泡が徳市の背中を洗いながら上っていくのが見えた。泡は水面を目指して昆布の茂みの中へ消えていった。そして、泡が発した強い光が徳市の眼球の中で激しく拡がりはじめていた。

強い光は徳市の眼球の中で踊っているのだった。それは、樹葉の隙間から射しこむ木漏れ日だった。枝が風に揺らされるたびに、きらきらと白い光が瞬き、徳市の頭の中の記憶がぱつぱつとたかれたフラッシュに照らされて闇の中に次々と浮かんだような気がした。映し出された景色はどれも徳市が育った家のゴミの集積場だった。数十個の大きなビニル袋が道端に何段にも積み上げられていた。月曜にゴミを出すのは子供の頃の徳市の仕事だった。破れて中身がはみ出ているビニル袋があった

破れた穴からは、黒く光ってぐっしょりと濡れた昆布がどろりと地面にはみ出していた。僕はとっさに昆布をかき集めようとした。ぬるりとした昆布の感触が両手に感じられた。眼球の中にあふれていた真っ白な光が衰えていった。光はやがて見たことのある光のゆらめきが変わっていった。それは、いつか海底から見たことのある太陽の光だった。遠い、遠い光、けれども手のと届くすぐそこにあった。徳市は息を吐きながらその光に向かって上っていった。

徳市はその日のうちに荷物をまとめて漁師小屋を発った。二ヶ月間牧場で働いた後、日高山脈を越えて札幌へ出た。今度は暖かい南の海もいいなと思いはじめていた。落ちた海は冷たかった。今度落ちるならもっと暖かい海がいいと徳市は思っていた。

おわり